

『最愛の人』

著：仙道はるか

ill：桜 遼

毎日が退屈で、つまらなくて、このままでは生きながらに腐ってしまいそうだと、半ば本気で思うようになっていた。

だから、そんな自分が今夜のパーティで『彼』と出会ったことを、彰はまるで奇跡のようだと思った。

(これで、当分は退屈しないですむかもしれない)

とはいえ、この先どうやって、『彼』との関係を深めていくかが、彰にとっては大きな問題になりそうだった。

「……気持ち悪い……」

青年の軽い身体を抱きかかえるようにして、自分に与えられているホテルの部屋へと入った彰は、まずは真っ先に洗面所へと青年を案内したのだが、なぜだか頑なに吐くことを青年から拒否されたので、仕方なく今度はベッドルームに彼を連れていった。

「だから、何度も言うようですが、吐いたほうが楽になれますよ？」

「やだ……勿(も)っ

体(たい)

ない……」

「……何を言ってるんですか」

ベッドの上にぐったりと転がった青年のその言葉に、彰は軽く呆(あき)れたような溜息をつきながら部屋に備え付けてある冷蔵庫へと向かった。

今夜、御堂一族には全員エグゼクティブスイートが与えられている。

従兄の玲は、このパーティが終わった後にも雑誌の取材の仕事が入っているとかで、ホテルに泊まることができないらしいが、それ以外のパーティに参加している親族は皆、今夜はこのホテルに宿泊するはずだった。

とはいえ、都内でも最高級のグレードを誇るホテルのエグゼクティブスイートは、一人で泊まるには少々広すぎる。

特に広いベッドは、大の大人が四人寝てもまだ十分に余裕がありそうだった。

そして、件(くだん)

の青年が今横たわっているのは、リビングの奥のベッドルームに置かれているキングサイズの巨大なベッドの、まさにその上だった。

(部屋に連れてきたまではいいけど、この後はどうしようか?)

パーティの招待客であることは間違いないと思うのだが、依然として青年の正体は分からないままだった。

先ほど、彼をベッドの上に寝かせる時に、彰は青年が着ていた仕立てのいい上着を脱がせた。

せめて名前くらいは知りたいと思い、その上着のポケットの中を、悪いとは思ったがこっそりと探してみたのだが、彼は自分の身分を証明するものは何も持っていなかった。

おそらく、ホテルのクロークに預けているのだろう。

どうせ一人では持て余すほどに広い部屋なので、彰のほうは彼を泊めても別に構わなかったが、青年の意見はどうなのだろう？ と疑問に思う。

なんせ、相手は同意の上か不可抗力かは分からないが(まあ、状況から判断して後者だろうとは思っただが……)

、何やらヤバげな薬を盛られて発情中だ。

彰に気(け)

取(ど)

られないようにとの配慮なのか、青年は下肢を隠すようにして横たわっていたが、ベッドに彼を運ぶ途中で、彰は青年が昂(たかぶ)

っていることには気がついていて。

こうなると、同じ男なだけに、青年が今どれほどに懊(おう)悩(のう)しているのか、手に取るように分かる。

彼を楽にしてあげるにはどうすれば一番簡単なのかは既に分かっていたが、節操なしの従兄とは違って、彰は今まで同性を相手にしたことがなかったので、さすがに少しばかり戸惑いがある。

(とはいっても、せっかく神様が与えてくれた機会を、みすみす逃すのも勿体ないしな……)

さてどうしたものかと、考える素振りで指先で眼鏡を押し上げながら、彰はとりあえずは片手にミネラルウォーターを持って、ベッドに転がっている青年へと近づいた。

「冷蔵庫の中にミネラルウォーターがありました。どうぞ、飲んでください」

彰がペットボトルの蓋を捻(ひね)

って渡すと、青年は機嫌の悪い獣のように低く唸(うな)

りながらも、ベッドの上に上体を起こした。

開き直ったのか、股間の膨らみを隠すことをやめたその姿は、ある意味では潔くて男らしいとも言える。

「……だいぶ、楽になった。ありがとう」

確かに、なんとか会話は成り立つようになったが、青年の熱っぽく潤んだ瞳は依然変わらず、それどころか彰を見つめる眼差しには、ゾツとするような色香が漂っていた。

「そうですか、それはよかった」

「あんたさ……」

「はい？」

ベッドの脇に立ったままでいた彰の指先に、不意に青年の白い指が艶(なまめ)かしく絡んできたので、彰は思わず目を見開く。

「……俺が今、どんな状態なのか分かってるんだろ？」

「ええ、だいたいのところは、なんとなく」

身体中の体温が上がっているせいか、青年は指先まで熱い。

しかし、けっして不快ではない体温に彰が目を眇(すが)

めると、今度は少し強く手を引かれた。

どうやら、傍に座れと言っているらしかった。

促されるまま従順にベッドに腰を下ろすと、青年はすぐに猫のような仕草で彰の近く

へとすり寄ってきた。

花のようなコロンの香りに混じって、青年からは僅(わず)かに甘ったるいような匂いがする。

これが彼の体臭なのだとしたら、随分とそそられるものだと、大きな琥珀(こ)珀(はく)色(いろ)

の潤んだ瞳で自分を覗(のぞ)

き込んでいる美しい青年に向かって、彰は無意識に微笑んだ。

「なあ、なんで、俺のこと拾ったんだ？ もしかして、下心でもあんの？」

青年の白い手が、彰の太(ふと)

腿(もも)

の上で軽く爪を立てる。

この手の経験が豊富ではない彰でさえ、誘われているのだとすぐに分かる仕草だった。

「下心、ですか……。確かに、まったくないとも言い切れませんね」

今さら、お近づきにはなりたいとは思ったが、性的な意味合いでの下心はなかったと言ったところで、青年が素直に納得してくれるとも思えず、彰は逆らわずに同意する。

すると、青年は途端に嬉しそうに艶(えん)

治(や)

に笑って、彰へと抱きついてきた。

いくら美しいとはいえ同性の、発情して熱く火照った身体を押し付けられたというのに、嫌悪は微(み)

塵(じん)

も感じられなかった。

本文 p23～27 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>